

# 談話標識とポライトネスについて

廣瀬 浩三

## 0. はじめに

本稿では、談話標識とポライトネス (politeness) の関係を考察していきたい。ここでいうポライトネスとは、会話の相手に対する敬意や配慮から丁寧な表現を用いることを表している。そして、こうしたポライトネスを示す方策の一つとして、談話標識が利用される場合がある。また、相手に対する敬意を示すというよりは、もっぱら話し手の自信のなさや自己防衛的な心理から、直接的な言い方を避け、控えめな表現を用いることがある。このような場合にも、談話標識が巧みに用いられて、相手との関係がうまく調整される。

上記のような言語的ポライトネスを理解するにあたって、その古典的な理論である Brown & Levinson(1978/1987) の基本概念を踏まえた上で、Leech(1983) 及び Leech(2014) におけるポライトネスの一般化を紹介しつつ、具体的な実例分析を通して、談話標識の果たす様々な機能のうち、ポライトネスと関わる対人関係調整機能を明らかにしていきたい。

## 1. Brown & Levinson(1978/1987)

ポライトネスを理解するために、まず、Brown & Levinson(1978/1987) のポライトネス理論におけるフェイス (face) という概念について、少し説明しておきたい。フェイスは、日本語では「面子」や「顔」と訳されるが、本稿では、フェイスというカタカナ言葉を使用していく。

Brown & Levinson では、フェイスを大きく2つに分けて、ポジティブフェイス (positive face) とネガティブフェイス (negative face) に区分している。前者は、人に好印象を与え、人から認められたい、よく評価されたいといったことを表すフェイスである。一方、後者は、互いの自由を尊重し、相手に自分の領域に踏み込まれたくないというフェイスを表す。

こうしたフェイスを脅かす行為 (face-threatening act) との関係から、ポライトネスにはポジティブ・ポライトネス (positive politeness) とネガティブ・ポライトネス (negative politeness) の2種類が考えられる。ポジティブ・ポライトネスの効果を高めるためのさまざまな方策を上げることができるが、その中心となるのは会話を進めていく上で、話し手が相手と同じ立場に立ち、協力者であることを示すことである。ポジティブ・ポライトネスでは、相手を積極的に褒めたり、相手への興味関心を示したり、相手の意見との不一致を避け、同意や共感、さらに親密さを示す表現が用いられる。

他方、ネガティブ・ポライトネスは、自己主張を抑え、相手にかかる負担を軽減し、相手を傷つけないように配慮することで実現されるポライトネスである。したがって、相手に何らかの行為を依頼する際には、その依頼を断る選択の余地を与え、間接的で控えめな言葉使いをすることになり、相手に自分の欲求を押しつけない表現が用いられる。

## 2. Leech(1983) & Leech(2014)

ポライトネスの全体像を捉えるために、Brown & Levinson とともに、Leech(1983) と、その理論の拡大を図った Leech(2014) について、簡単に触れておきたい。

Leech(1983) では、P. Grice の協調の原理 (Cooperative Principle) と並ぶ形で、ポライトネスの原理 (Politeness Principle) を立て、その下位区分として以下の6つの公理 (maxims) を提唱して、ポライトネスに関わる言語現象を説明しようとした。

### Maxims of Politeness [Leech 1983:132]

- ( i ) Tact Maxim ( 気配りの公理 ) : minimize cost to O [and maximize benefit to O]
- ( ii ) Generosity Maxim ( 寛容の公理 ) : minimize benefit to S [and maximize cost to S]
- ( iii ) Approbation Maxim ( 賞賛の公理 ) : minimize dispraise of O, [and maximize praise of O]
- ( iv ) Modesty Maxim ( 謙遜の公理 ) : minimize praise to S, [and maximize dispraise to S]
- ( v ) Agreement Maxim ( 同意の公理 ) : minimize disagreement between S and O [and maximize agreement between S and O]
- ( vi ) Sympathy Maxim ( 共感の公理 ) : minimize antipathy between S and O [and maximize sympathy between S and O]

Leech 理論では、ポライトネスを説明するにあたって、厳密な規則 (rules) ではなく、Grice 流の公理 (maxims) を用いて説明したが、そこに、その長所と短所の両面がある。

ポライトネスは、広く対人間のコミュニケーションで生じる現象であり、常に話し手・聞き手が意識され、極めて語用論的な現象であるので、文法的であるか、非文法的であるかと言った二分立では捉えられず、各文脈において、何らかのスケール (scale) を想定し、そのスケールの中で段階的なものとして理解する必要がある。この意味では、公理は、その違反も認められ、柔軟性のある概念として機能するので、長所と言えるであろう。

しかしながら、実際のコミュニケーションの場で、どのような公理が適用され、どのような場合にその違反が生じるのか、説明が難しい。また、提唱された公理同士の衝突や競合が生じることも多く、その適用が恣意的になる恐れもある。さらに、提唱された公理が網羅的であるかどうかの保証がなく、随時、公理を追加していかなければならない事態が生じる。Leech 自身も Leech(2014) では、その適用範囲を広めるために、まず大きな制約として、以下のようなポライトネスに関する一般的戦略 (General Strategy of Politeness) を提唱し、公理については、以下の10項目に再整理している。

**General Strategy of Politeness:** In order to be polite, S expresses or implies meanings that associate a favorable value with what pertains to O or associates an favorable value with what pertains to S(S=self, speaker). [Leech 2014:91]

### The Component Maxims of the General Strategy of Politeness [Leech 2014:91]

Maxims(expressed in an imperative mood)	Related pair of maxims	Label for this maxim	Typical speech event type(s)
(M1) give a high value to O's wants	Generosity, Tact	Generosity	Commissives
(M2) give a low value to S's wants		Tact	Directives
(M3) give a high value to O's qualities	Approbation, Modesty	Approbation	Compliments
(M4) give a low value to S's qualities		Modesty	Self-devaluation
(M5) give a high value to S's obligation to O's	Obligation	Obligation (of S to O)	Apologizing, thanking
(M6) give a low value to O's obligation to S's		Obligation (of O to S)	Responses to thanks and apologies
(M7) give a high value to O's opinions	Opinion	Agreement	Agreeing, disagreeing
(M8) give a low value to S's opinions		Opinion reticence	Giving opinions
(M9) give a high value to O's feelings	Feeling	Sympathy	Congratulating, commiserating
(M10) give a low value to S's feelings		Feeling reticence	Suppressing feelings

なお、Leech(2014)においてもポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスが区別されているが、Brown & Levinsonでは、主にコミュニケーションの場で生じるフェイスを脅かす行為に関わっての区別であったが、Leech(2014)では、Brown & Levinsonと概念が重なる面も多いが、ネガティブ・ポライトネスはもっぱら話し手の控え目な態度を表し、両者は、ポライトネスが作用する方向性の対比的概念として区別されている。

本稿では、主としてBrown & Levinsonの考え方を踏襲して、以下、具体例を上げながら、談話標識とポライトネスとの関係の理解を深めていきたい。

### 3. ポジティブ・ポライトネスに貢献する談話標識

相手に同意、賛同したりするときには、談話標識の助けを借りながら積極的な態度を表すことで、相手を心地よくさせる工夫がされる。

(1) は、コロンボ刑事が容疑者のことを尋ねようと精神科医を訪れる場面である。患者に

関する守秘義務もあり医者との面会もできないところであるが、受付でうまく取り入っている。また、(2)では、マックスがアダムに健康のためだと無理やりプールで泳がされた後の発言である。

- (1) “I’m sure Dr. Hillard will extend every possible cooperation.” “Of course, of course. No doubt. So—”—W. Harrington, *Columbo: The Glitter Murder* (「きっとヒラード先生は可能な限りの協力をしてくださいますよ」「もちろんです、ごもっとも。間違いありません。それで...」)
- (2) Afterward, as they sat in the locker room drying off, Max confessed, “I hate to admit, but I actually feel wonderful. Now I only hope nobody from the lab saw me. I feel undignified without a tie.” “By all means bring one to the pool next time.”—E. Segal, *Prizes* (その後、ロッカールームに座って身体を乾かしながら、マックスは内心を打ち明けた。「認めたくはないが、実はとてもいい気分なんだ。研究室の誰も私の姿を見なかったことだけは望むがね。ネクタイなしじゃみっともないからね。」「次回はぜひネクタイをプールに持って行ってください。」)

(1)では、相手の言葉に *of course* を繰り返し用いて積極的に賛同し、丁寧に言葉を返している。(2)の例では、同僚に泳いでいる姿を見られたくなかったことを冗談交じりで述べたことに対して、*by all means* を命令文につけて応じている。冗談を冗談で切り返したわけであるが、*by all means* をつけて強調的に述べることで親近感が増し、ポジティブ・ポライトネスの効果が表れている。また、Leech(2014)に従うと、上記の例は、主として M 7 (Agreement) の公理が適用されていることになる。

次に、間投詞的な談話標識がポライトネスに関わる例として、*well* の例を見てみよう。*well* は否定的な内容の発話をする際の前置き表現として用いられることが多いが、肯定的な内容とともに用いることもある。

- (3) “I brought you some strudel for your birthday,” she said. “Not apple. It’s nut. The best I ever made. You’re gonna wish you had more.” “Well, Rosie, how nice!”—S. Grafton, “G” *Is For Gumshoe* (「誕生日にシュトルーデル〔菓子名〕を持ってきたわ。」と彼女は言った。「中身はリンゴじゃないわ。ナッツよ。最高の出来栄えよ。きっともっと食べたいと思うわよ。」「まあ、ロージー、本当にご親切に有難う!」)

(3)のように、*well* から始めて、呼びかけ語で注意を引き、お礼の言葉が返ってくると、かえってそのお礼が際立つことになる。感嘆文とともに用いられていることにも注意されたい。この例をLeech理論に照らすと、*well* の部分では、M10(Feeling reticence)の適用となるが、全体としては、相手の親切さに言及して謝辞を強調的に述べており、M3(Approbation)、あるいはM5(Obligation (of S to O))の適用例として理解できる。このように、談話標識によっ

て、一つの発話の中で微妙な対人関係の調整が行われているのである。

さらに、第2人称代名詞を含む会話表現として *mind you* を見ておこう。この表現は元来、「これから言うことを心に留めておきなさい」という命令的な意味を表していたが、現在では、もっぱら注意喚起を促す談話標識として機能する。そして、*mind you* によって相手に注意を促しながら、相手との連帯感や親密さを生み出す表現効果もある。こうした *mind you* は、ポジティブ・ポライトネスの一例として理解できる。

(4a) は、実は親しい友人同士で、裁判で有利になるような証言をさせるために表面上はこっぴどくやつけた相手に謝罪している場面である。また、くだけた言い方では、(4b) のように *mind you* によって親密さをもたらし、その後に冗談を添えることもしばしばある。

(4) a. “Yes, I must apologize for that, old chap,” said Toby. “Nothing personal, as you well know. *Mind you*, it was damn stupid of Lennox to select you as his expert witness in the first place.”—J. Archer, *To Cut a Long Story Short* (「ああ、その件では謝らないといけないな。」とトビーは言った。「よくわかっていると思うが、個人攻撃をしたわけじゃない。言っておくがね、そもそもレノックスが君のことを鑑定人に選んだことが大馬鹿だったということさ。」)

b. “So Roy Keane’s on 50 grand a week. *Mind you*, I was on 50 grand a week until the police found my printing machine.”—Guardian, 2/3/2002[Bell, 2009:918] (「ロイ・キーンは一週間に5万ポンド稼いでいるんですよ。もっとも、私も警察が偽札づくりの印刷機を見つけるまでは週に5万ポンド稼いでいたんですがね。」)

いずれの例においても、*mind you* によって相手との心理的距離を縮めて、その後の発話で連帯感や親密さを表している。Leech(2014)の公理との関係では、*mind you* そのものを一つの公理と結びつけることはできないが、*Opinion* や *Feeling* と関わり、M7~M10の公理の適用例として処理することができる。

以上のように、談話標識はポジティブ・ポライトネスを生み出すさまざまな文脈で補助的な役割を果たしている。

#### 4. ネガティブ・ポライトネスに貢献する談話標識

「依頼」などを行う際には、何か相手に押しつけることになり、相手のフェイスを脅かす行為を強いることになるが、談話標識をうまく用いて押しつけをしていない印象を与える工夫がなされる。Leech理論では、主としてM2(Tact)の公理の適用として説明されることになる。

以下、ネガティブ・ポライトネスと関わる談話標識の例として、*please* の用法と *if* を伴うレキシカルフレイズの例を見ていこう。

#### 4.1 いくつもの顔を持っている *please*

*please* は、基本的に「依頼」を表す談話標識として機能し、話し手の利益のために相手に何かしてもらいたい状況があれば用いることができる。しかし「依頼」は相手に何らかの行為を押しつけることになるので、それを丁寧な言い方にする必要があり、その役割を果たすのが *please* である。命令文の文頭、あるいは文尾で用いるのが一般的であるが、依頼を表す疑問文ともよく共起する。ただし、(5a)に見られるように *You will* の後に来る場合や、疑問文の形式を取りながら下降調で発音される場合は、言い方は丁寧であるが、相手に対する警告的な響きを伴い、*please* 以下の内容を押しつけることになる。<sup>1</sup>

- (5) a. *You will please leave the room.*—Quirk, *et al.* 1985:571  
b. “Would you *please* shut up,” I said.—L. Block, *A Walk among the Tombstones* (「どうか黙って欲しいんだが。」と僕は言った。)

発話行為との関係では、「依頼」以外に、「許可」を求める際にも、基本的には話し手の利益に関わるので、文頭、あるいは文尾に *please* が現れる。

- (6) a. *Please could I leave early today?*—*OALD*<sup>9</sup> (お願いなんですけど今日早く帰っていいでしょうか?)  
b. “May I see her, *please*?” “Yes, of course.”—E. Segal, *Only Love* (「彼女に会わせていただけますでしょうか?」「いいですよ、もちろん。」)

「提案」についても、話し手の利益に関わっている場合には、*please* が添えることができる。(7)のように *let's* 構文とも共起するが、*let's*(= let us)を用いることで、もっぱら相手にして欲しい行為に表現上話し手自身を含めることで丁寧な言い方になっている。

- (7) “Let’s have it quiet, *please*.” He waited until there was silence.—S. Sheldon, *The Sky Is Falling* (「ご静粛をお願いします。」彼は沈黙するまで待った。)

「依頼」から一歩進んで、話し手の強い希望を相手に示すと「懇願」になる。懇願の気持ちは、(8a)のように *please* を強く発音したり、(8b)のように繰り返すことでより明確に伝わる。

- (8) a. “Come on out to the kitchen, *please* (原文イタ),” he entreated.—D. Davidson, *Tough Cookie* (「台所に来てくれないか、お願いだ。」と彼は懇願した。)  
b. He and Laurie had begun to argue over who would drive tonight. “*Please, please, please*, I want to,” Laurie begged. —J. Elbert, *Red Eye Blues* (彼とローリーは今夜誰が車の運転をするのか言い合っていた。「どうか、お願い、運転したいのよ。」とローリーは懇願した。)

次に、*please* の興味深い用法を見ていこう。*please* は、通例、単なる陳述文では用いられないが (Stubbs 1983: 72), 間接的に相手に何らかの行為を促す陳述に用いることができる。このような場合には、*please* は文頭に来ることが多く、*please* で相手の注意を引いて、その後に来る陳述文で話し手が望んでいることが明らかになる。(9b) のような否定文でも、何をしなければならないのか理解できないから教えてほしいということが伝わる。

- (9) a. Why do you ask, Dave?" "Please, I prefer to be called David," he replied.—E. Segal, *The Class* (「なぜそんなことを聞くんだい、デイブ?」「お願いだ、デイビッドと呼ばれる方がいいんだ。」と彼は答えた。)
- b. Please, I don't understand what I have to do.—*OALD*<sup>9</sup> (「お願いです、何をすべきか分かりません。)

さらに、*please* は、通例、「申し出」や「意向」を尋ねる疑問文、並びに「許可」求める発話の応答表現として用いられ、しばしば *oh* や *yes* と一緒に使われる。<sup>2</sup>

- (10) a. "Shall I close the window?"— "Oh, please."—*LED* (「窓を閉めましょうか?」「あっそうですね、お願いします。)
- b. "You want me to come?" I asked. "Yes, please," Irene said to me.—S. Grafton, "*G*" *Is For Gumshoe* (「私に来てもらいたいのか?」「ええ、お願いします。」とイレーンは私に言った。)

ただし、単独で用いられる *please* は、相手に対するポライトネスを表す以外の用法があり、少し注意する必要がある。(11a) のようにしばしば子供に行儀よくするように注意を与える場合や、(11b) のように、子供以外にも相手の言葉をさえぎったり、とがめたりする場合によく用いられる。(11b) は、父が死んだ当日に、妻のリスルがその形見の金のポケット時計を夫のアダムに渡そうとし、アダムが躊躇している場面である。

- (11) a. Children, please! I'm trying to work.—*OALD*<sup>9</sup> (「あんたたち、お行儀よくしてよ。お母さんは仕事があるんだから。)
- b. "I'll get it," she offered. "No, no," Adam said. "There's a plenty of time for that." "Please," she overruled him.—E. Segal, *The Prizes* (「それをとってくるわ。」「いや、だめだよ。」アダムは言った。「もっと後でもいいじゃないか。」「そんなこと言わないで。」と彼女は彼の異議を却下した。)

いずれの例でも、*please* によって表面上はポライトネスを表して相手に何らかの行為を押し付けられない形になってはいるが、実際には何か相手にして欲しくない、あるいは相手に同意できないという否定的な気持ちを伝えている。

#### 4.2 *if you like* の働き

*if you like* は、文字通りには「あなたが好むなら」の意を表す。この *if* 節は、通例の条件を表す場合とは異なり、帰結節とは直接的な因果関係は表さず、間接的条件節と呼ばれることもある。

*if you like* は、(12a) のように話し手自身の「申し出」や、(12b) のように「提案・勧誘」などを行う際に、文頭や文尾に添えられる。この表現を添えることで、「もしあなたの意に反するなら、断ってもいいですよ」と拒否する余地を相手に与えることになり、丁寧な言い方となる。

- (12) a. “*If you like,*” he said, “I’ll give Debra a call, ask if it’s okay to supply the information you’re looking for.”—E. McBain, *Mischief* (「よければデブラに電話して、あなたが探している情報を提供してくれるか尋ねてみましょう。」と彼は言った。)  
b. We’ll go to the Louvre tomorrow *if you like*.—MED (よければ明日ルーブル美術館に行きましょう。)

さらに、上例の「申し出」や「提案・勧誘」では、帰結節の主語は1人称であるが、次のように *you* を主語にして、ポライトな「許可」を表す場合にも用いられる。

- (13) “Look,” I said, smiling at her, “*If you like,* you can put on a hat and coat and walk out of here right now.”—L. Sanders, *The Seduction of Peter’s* (「ねえ、君がそうしたいのなら、帽子と上着を身につけてすぐにここからでていっていいよ。」と彼女に微笑みながら、私は言った。)

また、相手の「申し出」や「提案・勧誘」の応答として、単独で用いられる。この場合、丁寧な言い方になるが、相手に合わせているので、本人は必ずしも気乗りしていないこともあるので注意が必要である。

- (14) a. “Then I can call you again?” I said eagerly. “*If you like.*”—L. Sanders, *The Seduction of Peter S.* (「それじゃあ、あなたにもう一度電話をかけていいですか?」と私ははやる思いで言った。「どうぞ」)  
b. “I know what you want. But can we talk a minute?” “*If you like.*”—*Ibid.* (「君の望みは分かっている。でも少し話していいかい?」「いいですとも。」)

なお、*if you would* [*you’d*] *like* の方が、より丁寧な形となる。<sup>3</sup>

- (15) a. *If you’d like,* I’ll do the dishes.—LAAD (もしよければ、僕が食器を洗うよ。)  
b. “May I call you Ted and Jane?” “*If you’d like,*” Ted smiled back diplomatically, “but my



wife's name is actually Sara.”—E. Segal, *The Class* (「あなた方のことをテッドとジェーンと呼んでいいですか?」「結構ですよ, でも家内の名前は実はサラと言うんですよ。」とテッドは愛想よく微笑み返した。)

以上のように, *if you like* を用いることによって, 相手の意思を尊重して話し手の意向を一方的に押しつけていないという態度が表される。したがって, *if you like* はネガティブ・ポライトネスに貢献する談話標識であると言える。

## 5. 談話標識と自己防衛の心理

本節では, 相手に対して敬意を払うというよりは, もっぱら話し手の自己防衛的心理から用いられる談話標識について見ていこう。Leech 理論では, 複数の公理と関わりと考えられるが, いずれも Leech の言う *neg-politeness* と関係し, 主として, M4, M8, M10 との関連で, *modesty* (謙遜) や *reticence* (控え目) という用語で説明されることになる。以下, 具体例を見ていこう。

次の例は, 舞台女優になりたい女性が自宅を訪ねて来た監督に言う言葉である。

(16) “Oh—Hello. I didn’t know you were here. *I mean*—you’re early.”—S. Sheldon, *The Sands of Time* (「あら, こんにちは。お見えになっているとは知りませんでしたわ。いえ, 早くおいでになったんですね。」)

ここでは, 話し手が, 先行発話が相手に対して失礼になると考えたのと同時に, 相手を出迎えなかった非礼に対する自己防衛的な気持ちから, 言い訳を導入するのに *I mean* を用いている。

自分の陳述に制限を加えることを合図する談話標識も, 表現の正確さを示すとともに, 背後に相手からの反駁を避けようとする自己防衛的な心理が働いていることがよくある。そうした用法を持つ *anyway* の例を見ておこう。

(17) “If you were going by appearances and if you were up against the two of them, you would take Kenan out first. Or try to, *anyway*.”—L. Block, *A Walk among the Tombstones* (「君がもし容姿で選ぶとして, 2人に向かい合ったら, まずキーナンを選ぶだろうね。そうしようとするよ, 少なくともね。」)

ここでは, 容姿で相手を選ぶことを断定的に述べると相手から反論されかねないので, *anyway* の助けを借りて前言に制限を加えており, 自己防衛的な心理が窺える。

控え目に自分の意見を述べる際にも, 談話標識は力を発揮する。こうした表現は, 自分の意見を直接的に強く主張せずに, いわば垣根越しに言いたいことを伝えることになるので, 「垣根言葉」(*hedge*) と呼ばれている。垣根言葉が複数使われている例を挙げておこう。

(18a) はある女性が母親との関係を述べている場面である。また, (18b) は, アンディがマックスとタバコを吸うことやドラッグのことについて話をしている場面である。

- (18) a. “*In a way, I sort of took care of her, I guess,*” she continues, speaking to Lavinia. “Mothering. I must have been practicing up to actually be a mother.”—A. Adams, *Superior Women* (「ある意味, 言わば母親の世話をしたわよ, 多分ね。」彼女はラビニアに向かって言葉を続けた。「子育てのようなものね。きっと実際に自分が母親になることに備えて練習していたんだと思うわ。」)
- b. “*I just sort of figured, life is hard enough, you know? I don’t need my supposed recreational drug use making me unhappy.*”—L. Weisberger, *Revenge Wears Prada* (「ちょっと思ったんだけど, 人生って厳しいものよね。でも気晴らしのつもりでドラッグを使用して不幸になる必要はないわ。」)

(18a) では, *in a way, sort of, I guess* といった表現が控え目な表現効果を生み出し, 自分が母親の世話をしてきたことを自慢げに述べることを抑えた表現となっている。また, (18b) でも *just, sort of, I figured, you know* などの垣根言葉を利用し, 相手の意見に反論するのにためらいがちな表現から切り出し, 自己主張をしている。

このような垣根言葉を用いて, 主張を断定的にせず控え目にすることで, 自己防御の機能が果たされる。あからさまな言い方をしないことで対人関係を悪化させないという利点がある半面, このような表現を使い過ぎると, 言いたいことが曖昧になったり, かえって相手を不快にさせる場合があるので, 注意が必要である。

## 6. おわりに

本稿では, 談話標識とポライトネス (politeness) との関係を説明した。談話標識がポライトネスに寄与する機能は, 談話標識が果たす談話構成と関わる主たる機能と比較し, より上位の機能レベルと言えるかもしれない。しかし, 会話の理解を深めるために, 会話の担い手である話し手が聞き手との対人関係をどのように調整しつつ, そつなく会話を進めているのかを探っていくことは極めて重要である。こうしたポライトネスと談話標識の関係をさらに深めていくことが, 今後の談話標識研究の大きな課題の一つであり, 幅広い談話理解に繋がると言える。

## 注

- 1 次の (a), (b) のように「単なる陳述」や「約束」を述べたり, (c), (d) のように相手の利益となる「申し出」や「招待」を表す場合には *please* は使えない。また, (e) のように「脅かし」もポライトネスを示唆する *please* とは馴染まない: (a) \*He ate more pudding, *please*. (b) \*I promise you can have some more pudding, *please*. (c) \*Would you like more pudding, *please*? (d) \*Do you want to come to a party, *please*? (e) \*Give me more pudding or I’ll hit you,

*please*. (以上, Stubbs 1983:72)

- 2 「陳述」(⇒(a)) や純粋な「疑問」(⇒(b)), さらに「依頼」(⇒(c)) を表す発話の応答表現として用いるのは, 通例不可と判断される。*please* は, 基本的に話し手の利益と関わっているので, その利益が感じられない場合には使われない。(a) A: That's a nice hairdo. B: \**Please*. (b) A: Have you got the time? B: \**Please*. (c) A: Will you open the door? B: \**Please*. (以上, Stubbs 1983:72-72)
- 3 その他の *if* 節を用いた会話表現として, *please* や *if you like* より古風で堅苦しい言い方の *if you please* がある: Spell it for me, *if you please*.—*LAAD* (お願いですから私のためにその綴りを教えてください。)他に, *if you want* や *if you would* も同様の機能を果たす: “Mind if I come in?” “*If you want*. Place is a mess.”—S. Grafton, “*J*” *Is For Judgment* (「入ってよろしいですか。」「どうぞ. ちらかっていますが。)」/ “What do you want me to do in the meantime?” I asked. “Just stay there, *if you would*.”—*Ibid.* (「その間私は何をしたらいいのですか。」「そこにずっといてください, よろしければ。)」

#### 参考文献

- Aijmer, K. 2013. *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Bell, D.M. 2009. “Mind you.” *Journal of Pragmatics* 44, 915-20.
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P. and S.C. Levinson. 1978. “Politeness: Universals in language usage.” *Questions and politeness: Strategies in social interaction*, ed. by Esther Goody, 56-234. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P. and S.C. Levinson. 1987. *Politeness: Universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fraser, B. 2006. “Towards A Theory of Discourse Markers.” In K. Fischer (ed.), *Approaches to Discourse Particles. Studies in Pragmatics Series 1*. Amsterdam/Tokyo: Elsevier Press. 189-204.
- 廣瀬浩三. 1988. 「英語の談話修正表現について」六甲英語学会(編)『現代の言語研究』263-74. 東京: 金星堂.
- . 1989a. 「談話辞 *anyway* の分析」『語法研究と英語教育』11, 29-38. 東京: 山口書店.
- . 1989b. “A Discourse Grammar of *anyway*.” 『島根大学法文学部紀要文学科編』11(2), 1-20.
- . 2000. 「語法研究の立場から見た談話標識」『英語語法文法研究』7, 35-50.
- . 2001. 「談話の展開を促す談話標識」『英語青年』Vol. CXLVII, No.7, 446-47. 東京: 研究社.
- . 2003. 「関連性理論から見た談話標識」『島大言語文化』14, 21-41.
- . 2012. 「談話標識を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第7号, 1-37.
- . 2014. 「談話標識を再考する」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第9号, 1-33.
- . 2015. 「Well の感覚」『島根大学外国語教育センタージャーナル』第10号, 1-26.
- . 2017. 「談話標識のシノニムの記述を巡って」『島根大学外国語教育センタージャーナル』

- 第 12 号, 1-12.
- 一. 2018. 「談話標識と言語使用域について」『島根大学外国語教育センタージャーナル』 第 13 号, 1-15.
- 一. 2018. 「談話標識をよりよく理解するために」『ことばのパースペクティブ』 368-379. 中村芳久教授退職記念論文集刊行会 [ 編 ]. 東京 : 開拓社 .
- Jucker, A.H. and Y.Ziv (eds.). 1998. *Discourse Markers: Description and Theory*. P&B ns.57. Amsterdam: John Benjamins.
- Lakoff, R. 1973. “*The logic of politeness; or minding your p’s and q’s.*” Chicago Linguistics society 9. 292-305.
- Leech, G. 1983. *Principles of pragmatics*. London: Longman.
- Leech, G. 2014. *Principles of politeness*. New York: Oxford University Press.
- 松尾文子・廣瀬浩三・西川真由美編著. 2015. 『英語談話標識用法辞典』—43 の基本的ディスコースマーカー—. 研究社.
- 松尾文子・廣瀬浩三. 2014. 「英語談話標識の諸相 (1)—英語談話標識研究の変遷」『梅光言語文化研究』 第 5 号, 1-38.
- 松尾文子・廣瀬浩三. 2015. 「英語談話標識の諸相 (2)—談話標識についての基本的考え方と分析の観点」『梅光言語文化研究』 第 6 号 5, 1-51.
- Quirk,R., S.Greenbaum, G.Leech and J.Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Schourup, L. 2001. “Rethinking well.” *Journal of Pragmatics* 33(7), 1025-1060.
- Schourup, L.C. and T. Waida. 1988. *English connectives*. 東京 : くろしお出版 .
- Stubbs, M. 1983. *Discourse Analysis: The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Chicago: The University of Chicago Press.